
ハリボテの国

寿々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハリボテの国

【Nコード】

N0413B

【作者名】

寿々

【あらすじ】

キノの旅（電撃文庫）のオリジナル小説です。原作に、似たような話があったらごめんなさい。

草原の真ん中に、一体のモドラド（注：二輪車。空を飛ばないものだけを指す）が走っていた。

「まだなの？」

モドラドが聞く。

「・・・多分」

運転手が答える。

「もう疲れたよ」

「モドラドも疲れることってあるんだ」

運転手が茶化すように聞く。

「・・・多分」

会話は途絶えた。

すぐに再開されたが。

「ねえ、キノ。本当にまだなの？」

キノと呼ばれた運転手が答える。

「そんなの、ボクに分かるはずが無いよ。エルメス、ボクは地図じゃない」

エルメスと呼ばれたモドラドが、深い溜息をついた。

「疲れた・・・」

その国は、草原を抜けた、砂漠の真ん中にあつた。
見た目は美しかった。とても。綺麗だった。

「あの国だよ。やつとついた」

キノは、砂漠の真ん中にある、城壁で囲まれたその国を
うつろな目で見ていた。

「どうしたの？キノ」

「お腹すいた・・・」

「じゃ、携帯食料食べれば」

キノは、エルメスの提案に、とんでもない！というように首を振った。

「近くに国があるのに、もったいなくて食べれないよ」

「じゃあ早く行こうよ」

「そうしたいんだけど、お腹がすいて、力が入らない」

「だから、携帯食料食べなって！」

エルメスは、じれったいキノを大声でしかりつけた。

その声は、エルメスのエンジンの音より五月蠅かった。

「あの、入国許可が欲しいんですけど」

キノは力を振り絞り、ようやく城壁まで来た。

「滞在期間は？」

「3日間。観光と休養目的です」

城壁の前にいた兵士は、ちよつとまっつてと言うと、キノをじろじろと見た。

「感じるー」

キノにしか聞こえないような声で、エルメスが呟いた。

やがて兵士は、無線で連絡をとった後、満面の笑みになってキノを見た。

「お待ちせしました。旅人さん。あなたの入国許可が取れました。

ホテルもレストランも手配してあります。入ってすぐにリムジンがありますので

それにのってください。ホテルまで案内します。ええと、お名前は」

「キノです。こっちは相棒のエルメスです」

「どうもー」

兵士は、そうですか、と言ってキノの名前を入国者ボードに書き込んだ。

「すごいね、キノ。リムジンでホテルまで送ってくれるなんて」

キノは、窓の外を見たまま

「そうだね」

と、生返事を返した。エルメスが、もー、と怒ったような声をだした。

「久しぶりのお客様ですから。ホテル代もお安くしておきますね」

「ありがとうございます」

返事はしたけれど、キノの視線はずっと窓の外だった。

街中も綺麗だった。ドレスを着た女たちが買い物をしているし、スーツをきたジェントルマンが、コツコツと足音を立てて歩いている。

「綺麗な国でしょう。経済的にも豊かだし、食料にも困らないんです」

「よかったね。キノ。きっとココで食料を買えるよ」

「うん。でも、まずホテルに着いたらシャワーを浴びよう」

あ、やっぱりご飯にしようかな」

エルメスがまた、もー、と言って、運転手がクスクス笑った。

ホテルの中も、これ以上無いというくらい綺麗だった。

値段が高いんじゃないか、と心配していたキノの予想を裏切り

ホテル代を大幅に安くしてくれた。

「やっぱりいい国だね。キノ。人も優しいし、町も綺麗だし。皆幸せそう」

エルメスが窓の外をみて、キノに報告する。

「そうだね。さっき国王にも合わせてもらった。感じのいい人だったよ。」

でも」

「でも？」

エルメスがキノの発した言葉を繰り返す。

「おかしい。これだけ豊かな町なのに、路地裏にボロボロの服を着た人が

たくさんいたんだ」

「そりゃー、どの町にも一人や二人いるでしょー」

「うっん。一人二人なんてもんじゃない。」

100人か200人くらい居た」

真剣に考えるキノをみて

「見間違いじゃない？」

と、エルメスが言った。

「わかんない。明日、また考えてみる」

そう言つて、キノはベットに倒れこんだ。

「気持ちいいー。幸せー」

それだけ呟くと、キノは寝息を立てて寝てしまった。

「夕飯どうするんだよ・・・」

エルメスは心配したが、キノはちゃんと夕飯の予定時間に起きた。
すぐく眠そうだった。

夕食から帰ってきたキノは、不思議そうな顔をしていた。

「お帰りー。どうだった？」

「おいしかった。知らないものがたくさんあったけどね。」

でも、厨房にいるのが、身形はいいけど顔はやつれた人ばかりだった」

「そりゃーそういう事もあるでしょ」

「そうかな・・・。明日町を走ってみよう」

そう言つと、キノはまたベットに倒れこんで、寝てしまった。

次の朝。

キノは夜明けと共に、起床した。

エルメスを起こさないように部屋から出て、近くの公園で

パースエイダーの訓練と整備をした。

キノの右腿にあるのは、リヴォルバー・タイプのハンド・パースエイダー。

これを、キノは『カノン』と呼ぶ。
もう一つ、腰のところには二二口径の自動式。
これを、『森の人』と呼んでいる。

キノは、やるべきことを全ておえ、ホテルへ帰ろうとした。
そのときだった。

公園の草陰から、一人の子供が這い出してきた。

その子は、昨日車の窓から見た人たちと、同じ格好をしていた。
そして後ろから、その子の姉らしき人が現れる。

「何度言ったらわかるの。私たちは外に出てはいけないのよ！」
子供を叱りつけた。

泣きそうな顔で、子供は姉をみる。

「だって、僕、お腹がすいてたまらないんだもの」

しばらくの間、キノは二人のやり取りを見ていた。

「すいません。少しお伺いしたいんですけど」

子供と話すのに熱心だった姉は、慌ててキノのほうを振り向いた。

「な、ななな、なんでしょうか」

「あなた達は、外へ出てはいけないと言いましたね。どうしてですか」

姉は、周囲を確認するように見回した。そして、持っていたペンと紙で

簡単な略地図を書いた。

「今日の午後3時に、ココへ来て下さい。私が知っている限りでよければ

全て、お話いたします」

そう言つて、そそくさとどこかへ逃げてしまった。

キノの手の中に残された地図は、略地図にはあまりにも
綺麗過ぎるものだった。

そして、その紙の端には
「誰にも言わないで」

「お帰りー。いつもより遅かったね」

部屋に入ると、エルメスが声をかけた。

「そうだったけ？」

「そーだよ。誰かと密会でもしてたのかい？」

茶化すようにエルメスが聞く。

「やだな。そんなんじゃないよ」

「なんだあー」

つまらなさそうにエルメスがぼやく。

「さて、ボクは朝ごはんを食べてくるよ」

「さいですか。こっちも燃料足りないんだけどね」

「後で入れてあげるよ」

その日は、案内人が付きつきりで、国を案内してくれた。
この国は、太古から栄えていたらしい。

「疲れた」

「この案内人つてあれだよな。蟻がたかってめいる」

キノは頭をひねった後

「ありがた迷惑・・・・・・・・・・？」

「そうそれ」

キノはなんとか説得して

車からの脱出に成功した。

案内人は危ないから、と止めたが

ここは安全な国でしょう？という口をつぐんだ。

「絶対に路地裏に入っちゃいけません」

これだけは守ってください、と案内人はしつこく言った。

「なんで路地裏はだめなんだろー」

「その謎を今から解きにいくんだよ」

キノは地図どおりの道を

エルメスと一緒に進んでいった。

「わー。まさかこんな所に、こんな物があるなんて
悪趣味ー」

「という事は、表通りにいた人たちは、ハリボテみたいなもんだね」
そこには、老若男女問わず、たくさん人間が
奴隷のように働かされていた。

「ねえ、ここにずっといたら、監視役の人に見つかるよ。
目的地に行こう」

キノが目指していた家は、路地をさらに右へ曲がり
奥へ進んだところにあつた。

「た、旅人さん！ほんとに来て下さったんですね！」

今朝公園であつた少女は、嬉しそうな声をあげた。

その少女は、名を、ナージャと言った。

13歳だった。

「えーとお、まず、この国について

私達は、北の遊牧民でした。季節ごとに場所を移り住み、平和に暮
らしてきました。

この国ができたのは、5年前です。で・・・」

「ちよつと待つて。国は太古の昔から在るんじゃないの!？」

エルメスが口をはさむ。

「?いいえ。きっかり5年前ですけど。

で、私達がこの国を見た感想は、余りにもみすばらしい、でした。
どうせこの国は潰れるだろう。そう察した私達は、北へと歩こうと
したのです。

その時でした。長が・・・殺されたのです。ライフルで。

国の看守どもは、私達を無理やり引き込み、そして奴隷に仕立て上
げたのです。

私達は操り人形なのです。

5年前、私は8歳でした。なのに、朝から晩まで働かされ
貴族の生活を支えてきたのです。なのに!..」

ナージャは声を張り上げた。

「今度は実験の材料に使われているのです！よりよい暮らしのため、だなんて！！」

仲間は一人数ずつ刻々と減っていきました……。もうすぐ私も死ぬんです！！」

わあぁとナージャが泣き出した。その瞬間、部屋の中にライフルが飛び込んできた。

「！？」

「お前！なにを勝手に休んでいる。今は忙しいんだ！はやく戻って来い。」

早くしないとお前の頭をぶち抜くぞ！」

看守がわんわん喚いている。キノの存在に気づくと、慌てて敬礼した。

「これはこれは旅人さん。お見苦しいところをお見せして、申し訳ありません。で、なぜ、この様な汚らしいところへ？」

「この国のすべてを知るために」

エルメスが言った。キノはエルメスのタンクをぶつ叩いて黙らせた。
「なりゆきです」

キノが話をはぐらかした。ナージャが声を上げる。

「旅人さん！時間があるのなら！また来て下さい！！」

「それは無理だね。明日出国するから」

「時間あるんじゃないの」

キノはまた、エルメスのタンクをぶつ叩く。

「それじゃあ」

「キノがそう言うんなら仕方ないな。バイバイ」

ナージャが絶望の顔をして、看守に引つ張られていく。

嘘つき！！嘘つき！！キノの耳には、ナージャの叫ぶ声が響いた。

「ねー、キノ。あの子に何約束したの？」

「なんにも。自分を助けてくれるとも思ってたんじゃない？」

「……冷血。鬼。悪魔……」

「そうかな？」

次の日。つまり、キノとエルメスが入国してから3日目。

いつもどおり、パースエイダーの練習と整備をして、エルメスをたたき起こす。

「行こう。もう国を出たいんだ」

「あの子、もういいの？」

「ああ」

キノはエルメスを手押しで、町の中を歩いた。周りから、「旅人さん」と手を振ってくれた。

「旅人さん。ご滞在有難うございます。」

さて……」

「？」

兵士は、ライフルを取り出した。

「ふうーん。そーゆーコトだったんだ。ドンピシャだね、キノ」

「そうだね。なるほど。こーやってたんだ。」

ここに来た旅人は、3人に1人の確率で戻ってこないって言われている」

兵士は、にたりと笑った。

「あなた達には……そうですね。実験材料にでもなってもらいます」

「だってさ、キノ。どーする？」

キノは即答した。

「やだ」

「じゃ、頑張つて」

兵士は、ライフルを発砲した。その瞬間、キノが『カノン』を抜いた。

パァン！という発砲音と、白い煙が辺りに立ち込める。

目の前にいた兵士は死んだ。

「終わった？」

「まだいる。6人くらいじゃない？」

そう言つて、城壁のほうへ走つていった。
たちまち銃撃戦が始まる。

「いたぞ！あつちだ！とらえろ！」

3人の兵士が裏から回りこんでくる。

「あれ？」

そこにキノの姿は無い。

しかし、どこからか、弾が飛んでくる。

1人は頭から血を吹いて倒れた。もう2人は、首に直撃して、即死。
後の3人は、立て続けに発砲すると、どいつもこいつも頭にあたつた。

「みんな死んだ」

「わー、ほんと？」

「ほんと。さ、めんどくさいのが来ないうちに出發しよう」

「・・・・・・・・・・」

「エルメス？」

「それは、ちよつと無理があるかも、だよ」

砂漠の真ん中を、一体のモドラドが走っている。
後ろに見えるのは、大きな城壁。

「いいのかな。あれで」

「いいんじゃない」

モドラドと運転手が会話する。

「で、いったい何人殺したのさ？」

「．．．．．わかんない。兵士は全部」

「こわーっ！普段は善良なキノ君なのに！こわーい！」

キノと呼ばれた運転手は笑った。

「嘘。あの女の子みたいに働かされている人以外全部。

さすがに、その辺の貴族は殺せなかったけど」

「．．．．．そっちのほうが怖いんですけど．．．．？」

「でも、あの子も、楽になったかな？」

「そうかな．．．」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0413b/>

ハリボテの国

2010年10月8日14時34分発行